

# 「終戦の年のあの日、あの頃」

平成26年9月6日

於 高森町歴史民俗資料館時の駅  
講師 下市田3区 田戸 純市氏

先ほど家で外気温を測ってみましたら、31度でありました。おそらく今日は32度から33度くらいまでなるんじゃないかと思われます。とても暑い日になりました。お集まり頂きまして恐縮でございます。そういう訳で暑いので、お許しいたいて上着を脱がせて頂きます。

先ほど館長さんからご紹介いただきましたが、じつは昭和20年は、いよいよ南方の方で戦争が激戦になって、兵員がどんどん亡くなって兵員不足になりましたので、繰り上げて21年の徴兵該当者と20年の徴兵者を一緒にやった訳です。2年分を採った訳です。そうしなきゃならなかったのです。その最後の繰り上げの網にかかったのが私です。そんなことでお聞きいただきたいと思います。レジメを差し上げておりますが、話の途中で若干横へそれたり欠けたりすることがありますのでお許しいたきたいと思います。それでは座らせていただきます。

## 1 監視哨勤務

昭和20年の8月8日、この日は今考えてみると日曜日でありました。それで、午前前半で陣地構築の作業がありました。私たちは軽機関銃の班におりましたので露营地の傍の砂丘で3発点射、こうやってペッと引くと3発撃てるわけです。5発というとも5発点射で出ます。そういうような発射の訓練を受けました。その後休みになりました。そういうことで、忘れもしません昭和20年の8月8日は日曜日でありました。この日の午後に監視哨に立ちました。陣地の稜線を這って越えて、上番下番とありまして、上番というのはこれから就くのが上番で、勤務を終えたものが下番になるわけです。

前方凹地ではソ連兵が炊爨を始めたのか、煙が上がっていました。擬装網に草や木を差して叢に潜んで監視をするわけですが、なにしろ敵に面した稜線の、わずかに下がった位置ですから、もし動いたら敵に発見されて生きていることはかなわない所です。汗が背筋やみぞおちを伝わって流れ、蚋や蚊が喰いつくんですが動くこともできずに、ただ一人敵前にいました。孤独の長い長い一時間でした。ようやく交代の時、大息が出ます。後方から上番者が匍匐して近寄る。夕暮れで薄暮だから気がつかないように静かに姿勢を下げます。それで「敵の行動に変化はなし。前方凹地で野営の様相」と状況を申し送って下番となった。汗は軍衣袴を通してビショビショだ。やっと稜線を越えて擬装網を取る。顔も頸も蚋の喰い跡でブクブクに腫れ上がっている。

## 2 決死隊下命

勤務を終えてヤレヤレと思う間もなく「決死隊編成」の下命があった。いよいよ来るべき時が遂に来た、とそう思ったんです。老黒山の屯営を奪回せよという下命です。老黒山というのは今までの私たちの屯営で、国境から少し。今居る所は羅子溝と云って、国境からずっと裏の方だったんです。部隊の兵舎やなんかがあるその老黒山の屯営を奪回せよという命令でした。川江中隊長の訓示があり、武運があつたらまた会おうと、恩賜のたばこがないからと言って、前門というちょっと高級なたばこを一本ずつ渡され、それからビールを飲みまわして、後を戦友たちに頼んで固い握手をして陣地を下りた訳です。夜陰で、どこを歩いているのか、前の者の雑嚢の負紐を握って肅々として歩くだけ。何れにせよ敵中に間違いはない。

歩きながら手づかみで飯盒の飯を食う。最後の飯かと思ったら喉が詰まった。誰も語らない。唯黙々と歩く。皆何を思っているのだろうか。

## 3 補充兵の戦友と塹壕の中での会話

午前の戦闘配備の塹壕の中で荒閑二等兵（青森県出身、召集兵四十二歳）が、胸の物入れ、ポケットですね、から娘の写真を取り出して「十八になる。せめて嫁に行く日まで」と言って、ポロッと涙を零した。「貴様陣中だぞ。女々しいぞ」と言って叱り飛ばしたが、悪いことを言ってしまったと悔やまれる。戦場では異常な興奮に

追い込むのか、何しろ初めてのことばかりだ。四十二歳の大人に、若令十九歳の者が叱ってしまったのだ。戦場では異常、非情なことが起きるのだと思った。

#### 4 決死隊撤回の伝令

凡そ2時間位経ったころ、後方から伝令の兵が息せき切って跳んできました。「陣地が危ない。直ちに撤回せよ」とのこと。これはもう万事休すだと思って、胸は早鐘を撞くようで、鼓動が耳底に伝わってきます。決死隊に選ばれたんだ。どちらにしても今夜が最後だと腹が据わります。先刻来た道を走るようにして陣地に向かいました。

敵の探照灯が昼を欺くように、陣地前方を照らしている。我々の6月から築いた陣地・塹壕・蝸壺、つらかった思い出も今は懐かしい。ようやく陣地下の谷川、昨日15榴(15センチ榴弾砲)を、兵が力を合わせて引き揚げた地点にたどり着いた。ここの羅子溝(地名です)には歩兵283から285まで、3部隊が守備に当たっていた筈だが、戦況はどうなっているのかな!あの真っ黒い大きな戦車と自動車から撃ってくる速射砲の威力。ここでちょっと横道にそれます。

#### 5 ソ連軍の兵器、戦車

向こうの戦車は真っ黒で、ものすごく重戦車です。こっちの日本の戦車は茶色と黄色と緑の迷彩色で、何と違っていか大人と子どもくらいの差がありました。ひっくり返っているのは日本の戦車です。それから自動車が来るんだけど、あの時はアメリカはルーズベルトが大統領だったのかねえ、武器貸与法というんでソ連へどんどん武器を補充して、自動車もスチュードベーカーやフォードが主でした。その連中は日本の車のタイヤを一番最初に撃ったんです。そうすると走れんようになります。それで兵隊が中におるんだけど、それはマンドリンの楽器のような、一辺に60発も弾の出る、装填出来る、しかも腰だめでパラパララーと撃つんです。自動車は転覆して、日本の日産だとかいすゞの自動車の横には兵隊が皆撃たれて死んでいる訳です。まあ双眼鏡で見えていたけれども情けなかったですよ。皆死んじゃったんだと思うけれども。それからソ連の車は、運転台の所に十門ずつ十門ずつ、上と下にこう乗せて、ダイヤルで弾を込めて撃つ速射砲です。後で名前をソ連へ行って兵隊に聞いたら、「カチューシャ」だと。娘のような名前がついていましたけれども。もう自動車を運転台で目的地の方へ向ければ、とにかく一回に、20発は撃てるわけです。恐ろしい速射砲です。そういう物を持っていました。それからさっき言ったマンドリンだとか短小銃、向こうのあれは短くてこればっかです。それで帯皮をかけた俵たまで一遍に60発です。それから短小銃は30発出ます。聞いていれば「トゥルルルー」です。腰だめで、

日本のように照星頂照門しょうせいちやうしょうもんとを合わせて、ためて撃つのは違います。日本のは三八式歩兵銃だとか九九式歩兵銃で、装填出来るのが5発までなんです。そんな事で全く兵器も劣勢で。「これはもう…」と。そんな事を言うとえらいことになるもんで黙っていたけれども。今だから言うが「これはもう勝ち目はないなあ」と思った。そんなことがありました。日本の三八式歩兵銃なんていうのは日露戦争、日露戦争は明治38年ですから、あの年に考え出されたからそういう名前がついたんです。九九式というのは終戦間際に出来たんです。そういう兵器そのもの、あるいは車両そのもの全く向こうは優秀でこちらは駄目でした。それでもうこれは駄目かなと思って夢中で陣地まで来たんだが、撃ってこないんですよ。「おかしいな」と思ったら、ソ連軍は夜襲はしないんです。日本の軍は夜襲しましたが彼らはやらない。明るいうちはやるんだが。それはそうだよ、短小銃のこればかりのやつだからね。それで後方から弾薬も糧秣も補給が取れなくて孤立したようになって、それで指揮班が緊急の会議を開いた。

#### 6 連隊本部敵襲に全滅

その日の昼間の戦闘で連隊本部は松吉連隊長以下全滅しちゃったんです。指揮命令系統は途絶し、大隊中隊ごとの分散行動を余儀なくされたのだ。そういうことで本当に戦闘が苛烈極まるもので、一緒に入隊した萩原孝之、藤本二三男の両君も勇敢に戦って散ったそう。話を聞いて戦友小林利雄君と落涙、瞑目合掌しました。結局陣地を捨てて、河向うの六中隊の陣地へ撤退することとなり、陣地後方の鶴越ひよどりごえ、我々兵隊仲間ではそう呼んでいた岩壁を下りました。

## 7 兵隊と軍馬との情愛

第二大隊の機関銃、重機関銃は二機関銃と言っていました、重機ですので重くて、とてもそのままでは運べないので分解搬送することになっていました。全部岩頭で馬を放ちました。そしたら馬が主を慕っていない、そのうちの頭が岩頭から落ちて、かわいそうに駄目になりました。その兵と馬との情愛のつながりに、涙があふれました。気の毒だったです。

## 8 敵前渡河

河辺に出ていよいよ渡河です。満州の河だから表面は非常にペタンとしていました。川幅はゆうに50メートルはあって河の中は非常に急流です。なんちゅうか、我々は川向こうの六中隊に向かいました。この横の方が敵の陣地で、敵が居る訳です。「小銃は絶対に濡らすな」ということで、右手で高く掲げて濡らさないようにしました。左手で前の者の雑嚢の負紐を固く握って河に入りました。非常に急流で時々足がさらわれそうになるんです。転倒したらお終いで、必死で河の中を渡って行きました。河の中ほどまで進んだ時に突然敵の探照灯が我々を映しました。「ああもう駄目だ」と覚悟したが、撃って来ないんです。さっきも言ったけれども夜襲はやらないんです。無我夢中で岸に辿り着きました。岩壁に寄りかかりながら、もう精魂尽き果ててしまっていた。薬盒の中も雑嚢の中も軍袴の中も、水が一杯で重たい。何もいらぬ。ただただ無性に眠りたい。誰もそうだったと思います。気がついたら朝だった。東の空が眩しかった。とたんに空腹を覚える。雑嚢の中に乾麺麴（乾パンですね）があることを思い出して開いてみると、まあなんと哀れ。あの寒冷紗の袋から溶けて噴き出ている。乳児がおっぱいを吸うように袋に吸いついて、中の溶けたのを吸いました。美味しかった。あのことは忘れません。

やがて命令で六中隊の陣地に上がったんですが、六中隊は我々のお隣の中隊ですが（我々は五中隊です）すでに後退した後でした。何でも話によると六中隊の中隊長は陣地が死守できないと、喉を軍刀で突いて、自決を図ったけれども死にきれなかったということでした。さすが、陸軍士官学校出のバリバリの将校だと思って、立派な中尉だと思いました。

## 9 裸の寸暇

衣服を脱いで禪一本になり、木の上草の上に乾す。剣も濡れて錆びている。小銃、帯剣、弾丸の手入れに追われる。何時、次の行動命令が下りるか判らない。今日は幾日だ。あゝ8月16日だ。今年の盆も過ぎた。ここで死んでも来年の新盆だな、と思ったわけです。まあとに角こうなったら生きられるだけ生きるんだ、とそう思いました。

## 10 敵機襲来

不思議に静かでした。敵の奴どうしたのかな？と思って居たら、豈図らんや、敵機5機が、東の国境方面から、金属音を響かせて飛んできた。やにわに「衣類を隠せ」という命令が出て、慌てて乾し物をかき集めて木の陰に飛び込み、銃を構えたけれど、丸裸で生きた心地がしなかった。本当は機銃掃射がある筈、今までそうだったように、飛行機も来たんだからどうしたんだろうと思っていたら、低空飛行にも入ってこない。おかしいなあどうしたんだろうと思っていました。まるで我々の存在を無視したかのように、そして西の方角、西というと牡丹江のほうへ飛んで行きました。翼の赤い星が嘲笑っているかのように見えました。それにしても開戦の9日以来友軍の飛行機は一回も見えない。もう飛行機は無かったかも知れませんが、関東軍には。直ちに生乾きの衣服を整えて、前盒、後盒、120発の弾丸と、手榴弾2発はずしりと重く腰が締まって痛いくらいでした。もう補給は望めない。最後の一発まで命の綱だと思うと心が引き締まる。

## 11 撤退行軍（原始林の中）

やがて出発命令。何処を指していくのか判らないが、山の中の行軍だ。

全くの原始林。風倒木の太いのが苔むして横たわっている。全然空が見えない。ひんやりとして薄暗い。水野が落伍する。小兵、水野の小銃を持ってやる。背嚢の上に横に乗せ、負革を胸の前で左手で引いて歩く。右手には自分の銃がある。困るのは風倒木を越える時だ。両手は塞がって掴まることができない。落伍者が続出する。荷物は増える一方、腹は減って来る。食べるものは全然無い。「小休止」の号令がかかれば直ぐその場に仰向けに倒れる始末。振り返っても5メートル後ろの者が誰だか見当がつかない。暗い、夜とも昼とも判らない中を行軍して居るのだ。腹が減って目が廻る。

戦友の臼杵三郎も小林利雄も、目ばかりギョロギョロして俺の傍をついて来る。何も語らない。いや語れないのだ。時たま、帯剣が当たる音がする。下は苔、枯葉の上で足音はしない。全く不気味この上も無い。何でも班

長の云うのには、先頭は磁石を頼りで、西南の方向へ向かって進んでいるとのことだ。

野営も2回して、食べるものは、このくらいの携帯口糧が一回配られたきりで、飲む水も無い。

## 12 水を腹一杯飲んだ

大森林の中で、もう水筒には一滴の水も無くなってしまったんです。木の葉の露を吸った。いわゆるこれが本当の露命だ。露の命だと思いました。もうくたくたで、心身の異常、思考力も鈍って目も空ろに、中空を見るようになってしまった。フラフラになった中で、有難いことに、小林利雄も臼杵三郎も俺の身体の小さいのを気遣って労ってくれる。

18日の夜に入って、漸く森林鉄道に出ることが出来ました。皆抱き合って男乍ら泣いた。戦って死ぬのなら本望だが、山中で行き倒れになって死ぬのなら死に切れないと思ひ、誰でもそうだったと思う。だから泣けたのだ。枕木の上を歩くこと暫し。やがて河のある地点に辿り着く。「おーい、水だ!」と聞くか聞かぬか、一斉に河端に跳び降りると、腹這いになって、ゴクンゴクンと音を立てて飲む。幾度胃袋いっぱい水が飲みたいと思ったことか。今こそそれが叶ったのだ!「ああ生き還った」充たされた喜びの声があちこちに起った。

## 13 食べ物に生き還った

それからどのくらい歩いたか平地へ出た。部落はあるが人影が無い。多分、戦禍を避けて、何処かへ行ったのだろう。

付近の畑へ入って包米(とうもろこし)を失敬して貪り喰いつく。甘い汁が口いっぱい溢れる。食べた食べた。瓜も茄子も幾日ぶりか腹いっぱい食べた。

## 14 休養仮眠

その夜は林鉄の駅の周辺で野営をする。携帯天幕を被って腐ったように寝た。長い間の疲れが一度に出た思いだった。明ければ8月19日。休養を取ることにになり、河で水浴、小物の洗濯をしたり食糧調達をしたりした。

## 15 非常呼集

正午すぎ、突然呼集があり、中隊長から重大命令があるとのこと。緊張した面持ちで、全員線路端へ集合する。

## 16 中隊長の重大発表

中隊長は、全員を見渡しておもむろに口を切った。

「我が国は戦運遂に利非ず。去る8月15日、米、英、支、蘇四カ国に無条件降伏をした旨、通信隊より聴取した。情報は確度甲で間違いなく信用する。諸氏と長いこと行を共にしてきたが、こと此処に至っては、命の致すところに従い、軍の編成を解く。銃の菊の紋章を削り、遊提を外し、撃針を折り、銃把を叩き折り、河中遠く投入すること。弾丸は土中深く埋没処理されたい。痛恨やる方ないが諸氏の武運を祈る。長い間御苦勞であった。終わり!」

前に突いた中隊長の軍刀がわなわなと震えて居りました。聞き終わった瞬間、兵は皆号泣した。全てが地に涙となって落ちてしまいました。「解散」の低い声に三々五々兵は散った。

## 17 隊の編成解除

暫し呆然として居たが、臼杵に促されて、小林を呼び、三人で今後の行動について相談した。三人は義勇隊出で気の合った戦友。何時も一緒によく話し合った仲だ。これからの行動を一緒にしようと誓った。何とかして内地(日本)へ帰る為、とにかく鮮満境の凶們へ出ることに決まった。

先ず塩と味噌を調達して、成るべく早く、河下に向かうことにする。

## 18 兵器弾薬の処理

その前に小銃と弾丸を処理しなければならない。林鉄のバラスで菊の紋章を削り、入隊以来毎日毎日手入れしてきた九九式歩兵銃、厳しい担え銃、立て銃の教練、歩哨、射撃演習、戦闘訓練、15日の羅子溝の戦闘など、銃に纏わる思い出が、走馬灯のように頭を掠める。涙がボロボロ零れる。後から後から零れた。見れば小林も臼杵もやっぱり頬が濡れて居る。床尾板はレールに叩きつけて折る。涙は遂に嗚咽となった。叩き付けた音は暫く耳にこびり付いて、情けなく悲しかった。

柳条のひときわ繁った叢の中に、深い穴を掘って弾丸を埋める。重い目をして運んで来た命の綱も今は捨てるのだ。思えば演習の時に、戦友が薬莢を失くして、小隊全員で草の中を這って探したことがあった。それを今は弾丸を纏めて埋めるのだ。万感胸に迫る。小銃は河の中程ためて力いっぱい投げ込んだ。絶対に再使用されんことを祈って。

恐ろしいことだが、投げたらホッとした。手榴弾と帯剣は、道中何があるか判らんで持っていくことにして、3人林鉄に沿って歩き出した。

#### 19 生き馬の肉を食べた

途中に満馬、これはちょっと小さい、木曾馬よりもちょっと小さい馬です、が一頭いるのを見つけた。3人で林鉄の線路に追い上げる。小林は「どうするんだ」と云う。「いいから追って行け」と云って、俺は真中の枕木の上を、二人は線路の両側を追う。

暫く行くと河に出る。「鉄橋だぞ。しめた」案の定、馬は枕木を踏み外して、もんどり打って河原に落ちた。足の骨が折れたらしい。もがいても立てない。早速下へ跳び降りて、腰の牛蒡剣で生きている馬の尻肉を抉り取る。蹴るは鳴くは、後にも先にも生き馬の肉を抉って喰ったのは、この時が初めての最後。未だ温かい血の滴る肉に味噌を付けて食べた。腹ポンポンになるまで喰べた。その後は柳条を切って、肉の大きな塊を通して、各々腰に下げる。

馬の目にも涙が溢れていた。金蠅が卵を産んで、忽ち蛆が湧いて居る。可哀相だが許してくれ。南無阿弥陀仏と合掌して其処を離れる。腰の肉塊にも蛆が湧いて居る。何て早いのだろう。途中で河の中へ手榴弾一発ぶち込んで魚を山程浮かせて捕る。その夜は馬鈴薯と馬肉と魚で天好、中国語で大変よろしいという意味です、の甲だった。解放された食事はまた格別美味かった。

#### 20 戦友3人で野宿

格好の凹地を見つけて野宿することにし、一人2時間宛不寝番をする。

この時に蚊が来ないように、ちょうどこの時に入隊する時に奉公袋に入れてあった日の丸の旗があつて、あの白い所は駄目なんです。あの赤い丸い所を河の方に向けてとバアーと見えるんです。それで皆交代で不寝番をしました。

ああ内地、日本へ早く帰りたい。早く帰りたい。まあそうは言うけれども一体此処は東満の何処なんだ。長い残暑の中、虚脱の一日は暮れました。明日の運命も判らない。川面に浮いた枯葉のような我々兵隊はどうなるのだろう。

#### 21 ソ連兵に発見された

翌20日、3人で河原で昼飯を喰って木陰で涼んでいたら、ソ連の兵隊が銃を腰に50メートルくらい先で何か云って居る。シマッタと、反射的に3人は河原俵いに逃げる。水辺に居座り「どうする」と臼杵が云うが早いか、小林は咄嗟に手榴弾の安全ピンを抜いて「畜生っ」と云って石を打った。危機一髪。俺は後ろから彼の手から奪って河へ投げ入れた。20メートル位先だったか、物凄い水柱が上がって破裂した。水しぶきで3人はびしょ濡れになった。

咄嗟に俺は小林のビンタを続け様に十発くらい殴っていた。

「馬鹿っ! 貴様こんな所で犬死して何になるんだ。戦死にならんぞ!」

厳しく叱ると、小林は嗚咽して臼杵の肩を抱いた。

#### 22 戦陣訓に背いた

「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すなかれ」これはちょっとついでだから言いますが、これはこういうことなんです。この戦陣訓と云うのは昭和16年、1941年の1月8日に、陸軍大臣になった東條英機が「本書ヲ戦陣道徳昂揚ノ資ニ供スベシ」として全軍に下達したものです。その中の「名を惜しむ」の中に次のように記されております。「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すなかれ」この条項のために自決した将兵が、戦中戦後数え切れないほど出たんです。話は前に戻るが、わが戦友の小林も自決の虚に出たのであり、彼を責めることは許されない。今は故人になった戦友小林君の手記を読み返して、当時を偲んで哀憐切々たるものを覚える。これをちょっと読んでみます。

「最早これまでだ。生きて敵国の捕虜になりたくない。関東軍入隊以来、教育で完全に軍人の精神に慣れてきて

いた3人は話し合った。二人の戦友は、一時生きて、この際降伏し、後はどうしてもなる。逃げ出すとも死ぬとも。俺は此の際死ぬ。生きて捕虜の汚名を後世に残したくない。今だっ。二人と少し離れた大きな石の陰で、最後用の手榴弾の安全栓を抜いた。シュシュシュー。火薬の臭い。その時後ろにいた戦友樋口（現在田戸）が俺の手から手榴弾を奪い河へドスン。大きな音と共に、6～7米大きな水柱が立ち、我々3人の頭上に、正気になるように浴びせかけてくれた。と同時にソ連兵の自動小銃が、バリバリバリ。幸い石の陰で怪我は無かった。生きるんだ。精一杯生きるんだ。死ぬのは何時でもできる。俺は二人の意見に従いソ連軍の武装解除を受けて、ソ連軍の捕虜になったのだ」

こう小林の手記にあります。今考えてみれば本当に一触即発で、3人爆死する所でした。思えば身の毛のよだつ様な一瞬の出来事でした。軍隊の教育と云うものは恐ろしいことを強いたものです。

扱、東條英機は全軍に戦陣訓を下達して置き乍ら、戦犯の汚名を背に負って潔しとせず刑死したんです。死して罪禍の汚名を残して死刑になったのだから、運命の致すところとは云え、毅然としないのは私一人でしょうか。振り返って本当に情けなく思います。

そんなことがあって私は、もうこれはどうしようもないと、仕方ないと。それで私は義勇軍に入隊する時に頂いた、日の丸の旗と満州の五色の旗がありましたが、日の丸の旗を奉公袋に入れてそれを開戦になった時に肌へ縛りつけて、この日本の旗を敵に渡してなるものかと火を焚いて焼却しました。本当にありったけの涙がボロボロと零れました。悲しかったです。臼杵と二人で小林を説得しました。

## 23 ソ連軍に投降

帯剣も、手榴弾も、帯革も河の中へ投げ捨てた。恥ずかし乍ら丸腰になって、夕方ソ連軍に投降。小汪清<sup>しゃおわんちん</sup>の部落で武装解除を受けました。丸腰で行きました。まあやるならやってみろという気持ちでした。なかなか気が強い訳だもんで。こうやって手なんか挙げないで胸を張って行きました。それでここで武装解除を受けて、この時から長い長い絶望の抑留生活。シベリア連行の旅が始まった訳です。

## 24 連行（延吉収容所）

時に我々3人は年若い十八歳。繰り上げの最後の徴兵だ。まあそんな事で、さっき申上げたけれども繰り上げの最後の徴兵で、8月26日に南満の関東省<sup>えんせんち</sup>の延吉収容所に入りました。私はパラチフスに罹り、41度の熱発で、小林と臼杵に付き添われて医務室に行き、軍医の前で卒倒、担送されて隣接の陸軍病院に入院。優しく親身に看護してくれた二人の戦友と遂にこの日に別れたのです。

## 25 戦友

長い辛い抑留生活の結果、昭和23年（1948）5月に復員し、長野県安曇出身の小林と再会。熱い掌を握り合ったが、佐渡出身の臼杵の所在は今以て不明である。小林も他界してしまい、独り俺だけが存命しているのだ。

吾が青春時代は、義勇隊・開拓団当時は、朝露に光るバラ色だったが、軍隊、敗戦、終戦、ソ連軍に投降・連行されて、シベリア抑留・帰国・復員など、数奇な遍歴を辿った、血と汗と涙の明け暮れだった。

## 26 シベリア抑留・帰国復員

抑留を解かれて、ナホトカから舞鶴へ帰ったのは、3年経った昭和23年5月だった。

## 27 戦争体験者の不戦平和の訴え

あの忌まわしい戦争が終結してやがて70年になる。

今、戦争体験者が、人が人を殺す戦争の恐ろしさ、空しさを語り伝えて、子や孫に、不戦平和の心を教えて行かなくてはならないと、強く思い続けている。

俺も90歳近くなって、風化が進んで来たと思う。若い頃の鮮烈な体験を通して世に訴えて、恒久平和を祈念し、亡き戦友に哀悼の意を捧げて合掌します。

盂蘭盆会 年経り巡れど  
忘れざりき  
ソ連の戦車の地響く音を

羅子溝の戦闘を想起して詠む 平成26年8月9日

大変どうも、つまらん体験をお聞き下さりありがとうございました。

此処にその昭和20年8月、日ソ戦終戦当時の記憶を辿って記録して残す、ということで、終戦になった時の、満州関東軍第574部隊第2大隊第5中隊長の川江中尉の重大発表と訓示を申し上げます。

「諸氏に告ぐ。今朝未明、ソ連軍が満ソ国境全線に亘って侵入、戦闘を開始した。部隊司令部の命に依り我が隊も只今から戦闘体制に入る。各位上司の命に従い、ソ連軍を撃滅・撃破すべく、諸氏よく戦闘意識の昂揚に心し、覚悟を堅持して戦うべし。奮闘を祈る」

昭和20年8月19日（8月14日無条件降伏）軍の編成解除の発表と訓示

「諸氏に緊急重大発表をする。我が日本は去る8月14日、米、英、支、蘇四カ国に依る連合軍に対し、遂に無条件降伏を受諾した旨、通信隊から情報を得た。情報の確度は甲と信ずる。こと此処に至っては、軍上部の命令に従い、軍の編成を解く。（気を付け）各自所持の小銃の菊の紋章を削り、（休め）遊提を外し、撃針・床尾板を折って河中遠く投げ入れること。弾丸は土中深く埋没処理のこと。まことに痛恨已み難いが、涙を吞んで実施されたい。向後日本国の再興を図る為に、爾後の行動は各自に委せて、武運を祈る！長い間吾と行動を共にしてくれて御苦勞であった。終わり！」

どうも長時間ありがとうございました。